

研究概要

生徒の実態

本校生徒は教員との信頼関係は良好である。学習に対しても意欲的ではあるが、学習課題に対する考えを深めたり、継続的な学習や振り返りをしたりすることに課題がある。そのため、主体的な学習に取り組む姿勢が育まれていないと感じる。



研究仮説

学級や学年、社会の一員であるという自覚をもたせ、互いに学び合ったり認め合ったりすることで自己有用感を育くむことが主体的に学習に取り組み、学び続ける生徒の育成につながると考える。

目指す生徒像のイメージ

自ら課題を見出し、その課題に対して意欲的に取り組み、他者と協同して解決の方策を考えていける生徒。すなわち、高い自主性・協働意欲・参画意欲をもった生徒

この現状を改善するにはどうしたら良いだろう？



力を合わせて解決できた！



でも、こんな問題も起きるよね・・・？

- ・自分たちで課題を見出し、解決のために必要な方策を立案・計画することができる生徒
- ・解決の過程を自分たちで振り返り、評価し、更なる課題を見つけ出すことができる生徒

参画意欲

みんなで協力して解決しよう！



この部分は私に任せて！

- ・積極的に仲間と協力し、課題を解決しようとする生徒
- ・それぞれが自分の役割を自覚し、集団に貢献しようとする生徒

協働意欲

難しいけど、頑張って取り組んでみよう！



これみんなに話したいなあ！

この問題はこうやって考えればできそうだなあ

- ・課題に対して意欲的に取り組める生徒
- ・これまで学習してきた（経験してきた）ことをもとに、自分なりの考え（意見）が持てる生徒
- ・自分の考え（意見）を積極的に表現したいと思える生徒
- ・自分の学びを振り返って次につなげることができる生徒

自主性

3年間の取組のまとめ

1. 2年目

1. 部会の組織とハード面の整備

学習環境部

- UD化の推進
- 掲示物の工夫
 - * 教室掲示の工夫
 - * 月刊教科の運営
 - * 道徳コーナーの設置

授業改善部

- ペア活動やグループ活動の運営方法の改善
- ICTを活用した授業実践の提案
- 生徒の意欲を高める活動の提案

調査統計部

- 生徒アンケートの作成および実施
- 教職員アンケートの作成および実施
- アンケートの修正、改善

2. 教科部会、各種研修によるソフト面の充実



1. 授業実践の共有

ICTを活用した授業実践や一定の成果が見られた実践を教科を超えて集約・共有し、指導のボトムアップを図った。

2. 教科部会の充実

生徒アンケート結果や共有した実践を踏まえ、各教科部会で授業改善の仮説をたて、新たな教材や授業案のデザインを行った。

4. 実践の積み重ねと授業公開

デザインされた授業案を実際に授業に生かしていくことを繰り返してだけでなく、授業を常に他の教員に公開し、授業改善に客観的な視点を取り入れやすくした。

3. 実践の振り返りと分析

生徒アンケートや県学調などの結果を活用した授業の振り返りを行い、成果と課題を各教科で取りまとめた。また、それらを全体で共有し、更なる授業改善につなげていった。

3. 更なる授業改善に向けて



ビデオスタディの実施

空き時間などを利用して授業の相互参観などを行ってきたが、全員で同じ授業を参観し協議を行うことで1つの授業を様々な視点で見ることができ、更なる授業改善につながると考えた。そこで、授業を撮影しそれを全員で視聴・協議するビデオスタディを行った。協議のグループも固定せずに設定することで教科の枠を超えた視点で協議を行うことができた。

見えてきた課題

生徒アンケートから「誰かの役に立ちたい」という生徒や「仲間と協力することにやりがいを感じる」という生徒が増えてきた一方で、「できる人ができない人に教えているだけ」のグループ活動やつまづきを感じた生徒が「教えられるのを待っている」状態が多く見られる状況であった。授業のあるべき姿についてパラダイムシフトが必要であると誰もが研究に行き詰まりを感じていた。



4. 学びの共同体による授業改革

一斉授業の廃止

授業全てを通して4人グループでの学習形態に。これにより、授業参加への強制力が働き、誰もが「授業に参加しやすい」環境を作ることができた。また、分からなくなったらすぐに聞ける環境が学び合いを活性化させ、一斉授業ではついていけなかった生徒も意欲的に取り組む姿を見せ始めた。

共有の課題とジャンプの課題

授業の前半は教科書レベルの問題を扱い、後半は教科書レベルを超えた応用問題を扱う。はじめから4人班ということも助け、非常に難しいジャンプの課題でも「やってみよう」という姿勢を見せる生徒が多い。ジャンプの課題に夢中になる中で、基礎的な知識・技能を身に付ける必要感を強く持つ生徒が増えた。

ファシリテーターとしての教師

「教える教師」から「学びをデザインする教師」へ視点を切り替えることで、教師の話の時間が大幅に削減され生徒が考える時間が増えた。それにより、生徒が粘り強く課題に取り組む機会が保障され、自分たちの力で課題を解決したり、新たな課題を発見したりすることができた。

子供の学びに目を向けた授業参観・協議

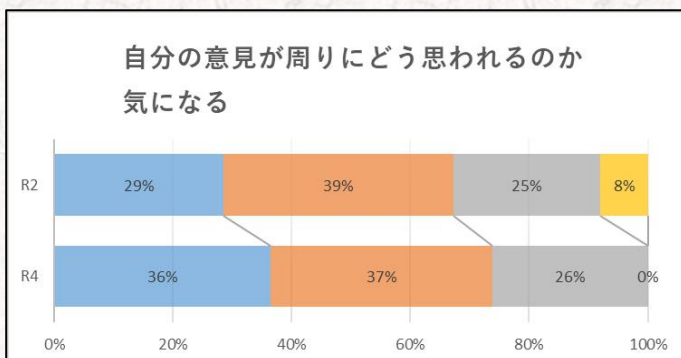
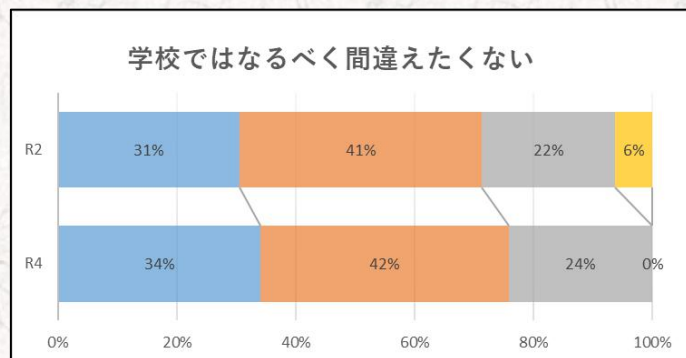
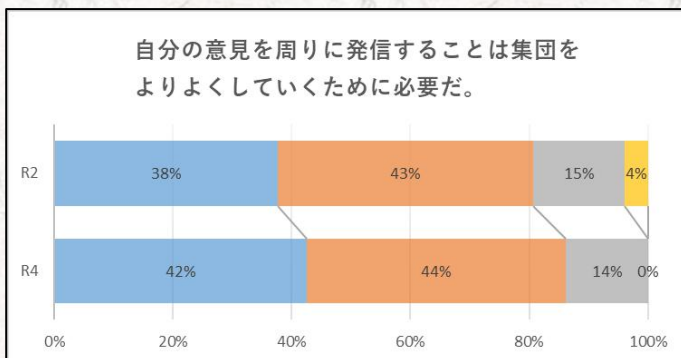
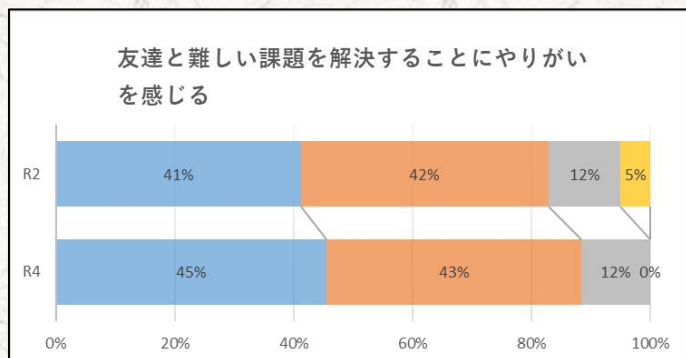
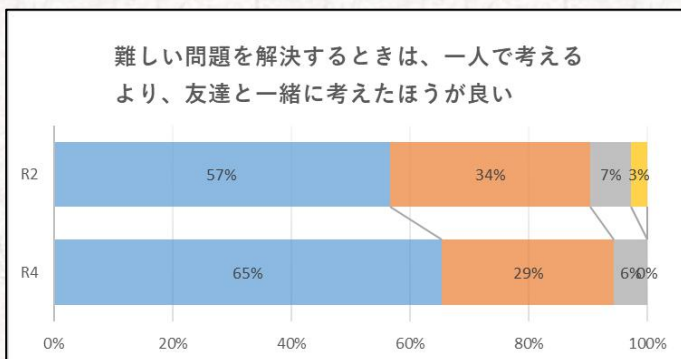
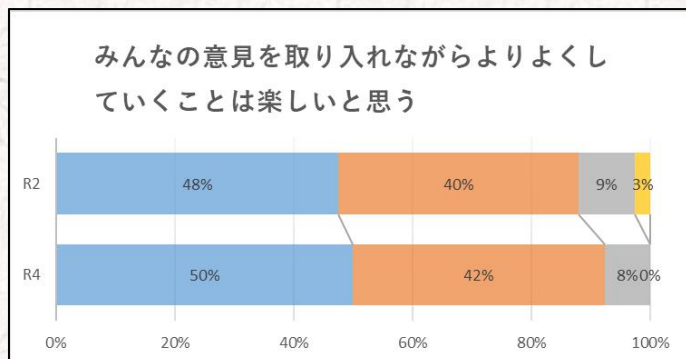
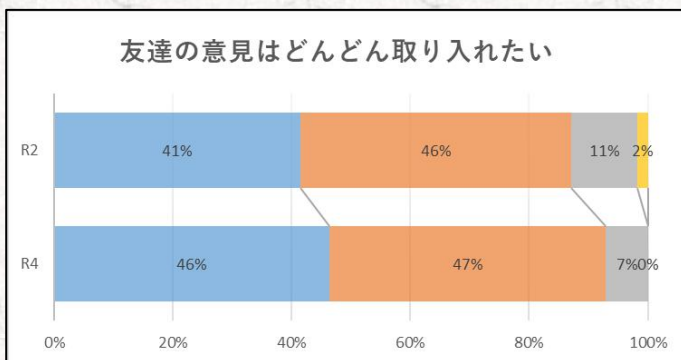
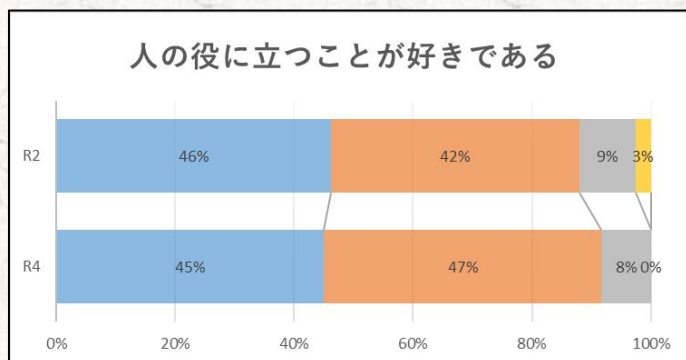
授業参観では「指導法」ではなく「子供の学び」を注視することでゴールは明確だが、方法は多彩なぶれない授業をイメージすることができる。授業の相互参観の協議についても「指導について」の議論から「子供の学びについて」の議論に移行することで、より生徒目線に立った授業改善を行うことができた。



成果と課題

研究1年目（上段R2）と研究3年目（下段R4）の生徒アンケートの比較

■ よく当てはまる ■ やや当てはまる ■ あまり当てはまらない ■ 全く当てはまらない



成果

- 他者と関わりながら課題を解決することに対して積極的な生徒が増えた。
- 課題解決の過程で自分がグループにとって必要な存在であるという認識を持つ生徒が増えた。
- 学びの共同体により、自分たちで課題を解決し、新たな問いを発見していく力を身に付けていける環境が整った。 など

更なる課題

- トライ＆エラーを積み重ねることの大切さを実感させる手立てを充実させる。
- 教師のファシリテーションスキルの更なる向上。
- 学びの共同体への理解を深め、学ぶ意欲の向上に効果的につなげていくための授業改善。
- 非認知スキルを適切に評価する方法の研究。 など